

特定非営利活動法人 太平洋戦史館

戦史館だより

2015年4月30日発行
 戦史館事務局〒029-4427
 岩手県奥州市衣川区陣場
 下41 髯オフィス花岡
 編集発行人 花岡千賀子

会長理事 岩淵 宣輝 専務理事 大瀧 久治 ☎0197-52-3000 FAX 0197-52-4575

H26年度の未送還情報収集 報告書を提出

厚労省委託の未送還情報収集は2010年に始まり、事業が中断された2011年を除く4年間現地派遣を継続してきました。その結果、パプア州からは693柱の遺骨が帰還しました。H26年度は5回の海外調査で、のべ24地点を調査。ビアク方面では開墾地で次々と遺骸が発見されました。ゲニム・ベラップ方面では、戦後補償問題で中断されたままの遺骨帰還の協議を、ようやく仕切り直しする方向が見え始め、スピオリ島方面では昨年初めて調査に入った小島で、今年なんとか収容できる見通しとなりました。

プアイ方面では、発見された遺骸を個別に収容できなかったため、日本兵の遺骸かどうか判定できないとして、除外された遺骨が多数残された問題も発生しました。遺骸の発見から収容、鑑定、遺骨帰還までは、どうしても期間が長くなるので、紛失や流出を防ぐためにも、目が行き届くよう仮安置所の設置を各地で進めました。

H26年度未送還は膨大な分量（厚さ4cm）の報告書類を4月始めに提出して終了です。残存遺骨情報記録票（海外24地点の詳細記録）、総括表、事業実施報告書、収支決算書、支出済額明細書、明細書内訳、全領収書の複写…。委託事業収入は、委託費20,548,836円 決算利息638円、支出合計20,791,320円、収支差額は-241,846円でした。現在、厚労省で領収書1枚1枚を点検し、問題がなければ7月末には精算済の通知が届くはずで

厚労省委託事業 H27年度も戦史館が受託

今年度の海外未送還遺骨情報収集事業（インドネシア）は企画競争入札の結果、戦史館の企画書が選定されました。5回連続で戦史館が受託しています。

今年度は6月、9月、11月、1月、3月に、計5回の派遣予定です。派遣団に参加を希望する方は戦史館までお問い合わせください。主な任務は記録作成ですが、現地事情に詳しい方、英語またはインドネシア語に堪能な方、30代～50代の若手の方などが対象です。各回の派遣人数は2～4名。団員には旅費と日当が支給されます。

2014年12月の厚労省との会議で「28年度以降の遺骨帰還事業は、議員立法で新たに設立される指定法人に全戦域の調査が引き継がれ、委託事業は27年度で終了…戦史館会員の皆さんへ周知を…」と説明がありました。戦後70年も経て新たな組織？遅すぎる！と感じる会員が多数かもしれません。昨年の国会は時間切れ、今国会でも『戦争法案』目白押し。現時点で成立の見通しは不明のようです。戦場に廃棄され、忘れ去られた遺骸…人は死んでも人なのだから、カミとして祀るのではなく、一人一人の死者の人権を守ってほしい…戦没者のことを忘れないでほしい…戦後処理を通じて平和を守ることで、新たな戦争に加担しないでほしい…と願うのですが、4月の靖国例大祭に大挙して参拝する国会議員の皆さん、為政者は70年前の原点を忘れてしまったのか…どうか誠実に向き合ってください。

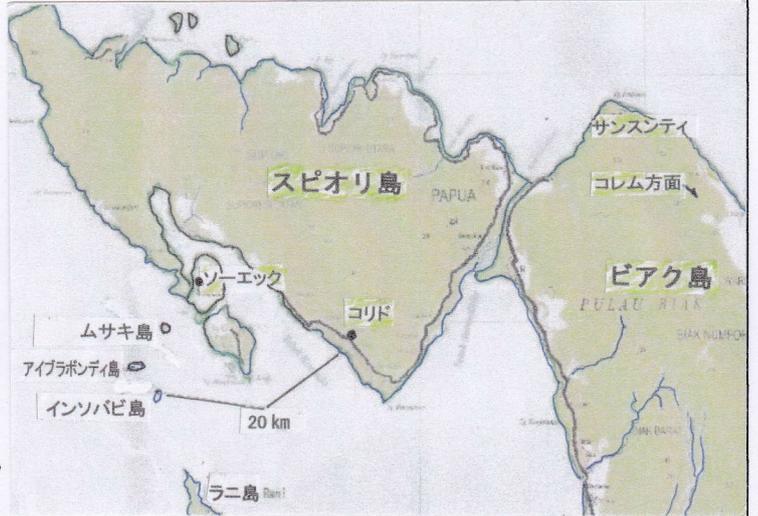
H26年度未送還 第5次派遣 報告者 古川雅基さん

～今回の派遣で特に印象に残ったのはアイブラボンディ島で、牧師さん、部族長、村長が合意して遺骸の掘り出しが実現したことと、最終日ビアク島で、原野の表土を剥がせば、その下から遺骸…遺骸…という状況を、この目で見て体験できたこと～

2月27日から西部ニューギニア方面遺骨情報収集事業に初めて参加した。岩淵さん、長井さん、私の3人はジャカルタ経由でジャヤプラに入り、プアイ村、ベラップ村へ。

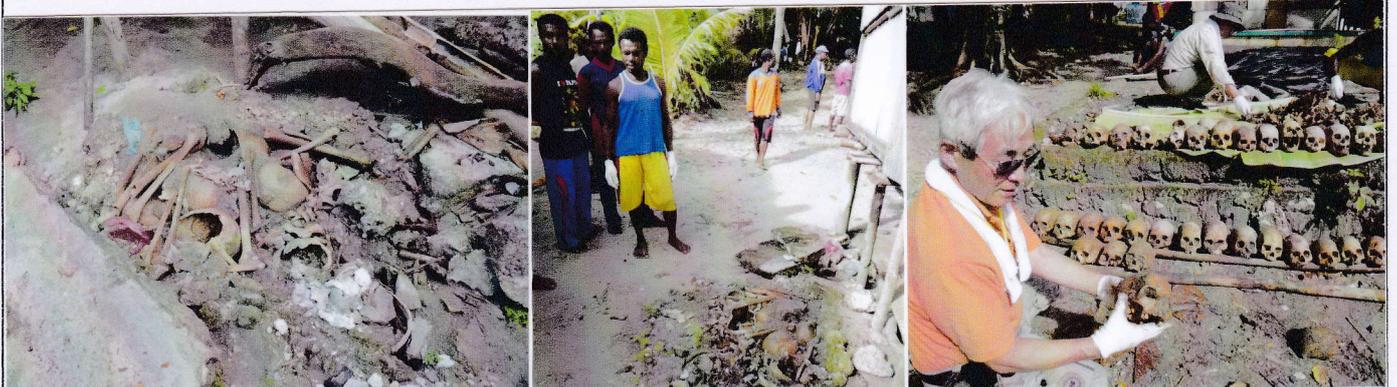
3月4日、ビアク島へ渡った。

3月5日、早朝から雨。ホテルから車でビアク島隣のスピオリ島へ向かう。3時間でコリド港に着き、そこから小型舟に乗る。スピオリ島の対岸の二つの島間にある海峡を抜けた場所ソーエックに水上生活者の村がある。そこから20分でムサキ島へ。ここは前年の調査で遺骸を確認した小さな無人島である。上陸し調査を行う。岩陰に無数の骨が散らばっている。中には歯が残った顎骨や頭蓋骨の一部も



ある。計5箇所遺骸を確認した。前年の調査の写真では整然と並べられていたので、その後の波の浸食で流されたと思える。戦争末期ビアク玉砕の後、生き残った兵士は、西側のスピオリ島へ敗走した。飢えと病気で息絶える兵士が後を絶たず、さらに沖の小さな島々に逃れた兵士は衰弱し、自決した日本兵も多かったという。

3月6日、舟でアイブラボンディ島へ。水上と陸上に約20軒の民家と教会がある。前年の調査では、民家の横にコンクリート状の固まりで蓋をした穴があり、蓋をずらすとその中に、日本兵と思われる10体ほどの遺骸が入っていることがわかっていた。部族長、牧師と話をし、「今回は、死者を天国へ送るために掘り出して検証したいので協力してほしい」とお願いし、部族長、村長、牧師さん、皆の了解を得ることができた。牧師さんの死者への祈りに続き、全員が祈りを捧げた後に作業を開始した。



写真左：昨年3月コンクリートの蓋をずらした状態。写真中央：民家のすぐ脇に掘られた穴。この中に40体が入っていた。写真右：穴の中から掘り出された遺骸を検証。

部族長はじめ村人総出で作業に協力してくれて、コンクリートの蓋をあけるといきなり

頭蓋骨が数体。掘り出すと大量の赤アリが動き回る。一つ一つ注意しながら取り出すと、次から次へと新たな遺骸が現れる。頭蓋骨の下からは大腿骨や骨盤などが出てくる。

運び出した先で、ヤシの葉の上に遺骸を並べる。数えると完全な頭蓋骨だけで38ある。不完全なものまで含めると40体以上か。今年の秋に予定されている遺骨帰還に向けた準備が始まる。法医学者による鑑定までに紛失しないよう、敷地の裏に設置した小屋に仮安置することになった。

この島は無人島だったが、戦後になって部族長の父が最初に入植し、浜辺に打ち上げられた遺骸をこの穴に埋めたのだという。村人の墓は少し離れた場所にあるのに、日本兵と思われる遺骸を、家のすぐ隣に埋めるという感覚が、私には不思議に思える。

この日は晴れ上がり、赤道直下の日ざしで、海は鮮やかなエメラルドグリーンに輝く。日本から5000キロ。こんな美しい島々で戦闘が行われ、多くの人が餓死したのだ。

3月7日ビアク島。西洞窟から車で30分、島の北東にあるスンデ村へ。民家の庭先にはこの周辺で発掘した日本兵の遺骨や遺留品が拵げられていた。中には『麒麟麦酒』の瓶や大量の薬品、十銭硬貨などがあり、日本兵のものと確認できる。〔編注…死線（四銭）を超える五銭や、苦戦（九銭）を超えて…と十銭が縫い付けられた千人針の可能性が大。〕



次の目的地アムプロベンスプと呼ばれる村の原野へ移動。丘の上で車を降り、少し下がると作業小屋があり、その下に向かって開墾地が広がる。畑にしようとして少し掘ると、いたる所から日本兵の遺骸、遺留品が発見されるという状況を目の当たりにした。

〔写真左：スンデ村。西洞窟の北東19kmの原野から発見された遺留品と5体分の遺骸。写真中央：アムプロベンスプの5ヵ所目で発見された遺骸と遺留品。写真右：アムプロベンスプの原野。開墾して畑にしようとして表土を剥がす程度で、次々と遺骸が発見される。〕

1ヵ所目からは、大腿骨に続いて頭蓋骨が出てくる。防毒マスクのメガネから東京出身者で編成された陸軍部隊と思われる。白い布袋に日付と場所をマジックで記入し、丁寧に遺骸と遺留品を収容していく。2ヵ所目、3ヵ所目、4ヵ所目は隆起サンゴ礁の岩陰にあり、敵の攻撃から身を守ろうとしたのだろうか。5ヵ所目からも同様の頭蓋骨や大腿骨、肋骨、遺留品が発見された。6ヵ所目は道路脇、長年、灼熱の太陽に晒され、風雨に打たれ、変色した大腿骨や小さな骨が散らばっていた。「この辺に歯があるはずよ」と現地女性の言うとおりに捜すと本当に歯が出てきた。アムプロベンスプでは15体が発見された。

戦後70年。『英霊』と持ち上げられた当事者は、このように放置され続けている。今の安倍政権がきな臭いだけに、政治に翻弄され、犠牲になり、戦後70年も放置され続けている遺骸が、何を訴えようとしているのか、彼らの声にしっかり耳を傾けたいと思った。